

「適当でいいかげんな仕事のすすめ／ 1日を24時間プラス α に」

“Recommendation of Working 「TEKITOU」 and 「IIKAGEN」”

檜原真弓 Mayumi HIWARA

高校卒業後の進路決定の際、「女性は手に職をもたなくては良い仕事につけない」と両親に言われた。しかし、当時はその意味がよくわからなかった。中学や高校の教育では男女平等が当たり前であったからである。女性が働くことの大変さを知ったのは社会人になってからである。振り返れば、女性であることで随分余分なエネルギーを使ったと思う。しかし、そのプロセスで女性ならではの仕事の進め方を学んだ気がする。

男女雇用機会均等法が制定されてからすでに四半世紀が過ぎようとしている。私が働き始めたときには制定されてから随分時間が経っていたが実体はほとんどもなわれていなかった。当時、女性の就職は一般に困難であり、仮に職を得たとしても、専門的なことを任されることはまれであった。しかも結婚したらすぐ退職という雰囲気があった。最近になってようやく、「男女共同参画」への取り組みが目に見えるものとなり、また女性の労働に対する支援の枠組みも中身も充実されつつあり、働きやすい環境が整いつつある。

しかし、男性と女性の間には働く環境とは無関係な大きな違いがあると感じている。女性は仕事にけることのできる時間が少ないのである。結婚後はさらにその時間が短くなる。女性には(と限定すると誤解を生むかもしれないが)、家事、出産・育児、介護など、職場を離れてもやらなくてはならないことが実に多い。やるべきことがいくらあっても1日が24時間であることには変わりがない。働く女性の多くは1日を24時間に収めるため自分のもち時間を削って辻褃を合わせている。

もち時間が少ないと感じる女性に1日24時間を24時間 $+\alpha$ に変える「適当でいいかげんな仕事」をお勧めしたい。「適当」とか「いいかげん」と書くとあまり良い印象を受けない。しかし「適当」とは「ある状態、性質、要求などによく当てはまること、的を射た、適切な」ことであり、また「いいかげん」とは「好い加減、ほどよい度合、適度」ということである。これらは決して手抜きを意味しない。「的を射た好い加減」なのである。

一般に、女性は「やりくりがうまい」というのが私の感じるところである。やりくり上手は、「限られたものを最大限に利用する。」ことに長けている。つまり「適当でいいかげんな仕事」をするのに向いているのである。現在、私が担当している〈オレフィン重合用メタロセン触媒の開発〉を例に「適当でいいかげんな仕事」について紹介したい。

「適当でいいかげんな仕事」を行う肝は、まず完璧を求めないこと、そしてムキにならないことである。オレフィン重合触媒の開発では、完璧な触媒の追及は工業化のハードルを上げることが多い。何ヶ月かけても触媒すら合成できないこともある。触媒はモノづくりの手段であり必要な性能を満足すればそれでよいのである。私は自分にこう問う、「求められている性能を出せる適当な構造の触媒をデザインしたか?」、「いいかげんな方法(工業的製造法)で合成できる触媒か?」と。「適当でいいかげんな仕事」だからスピードが速いのである。判断も迅速にできる。手前味噌かもしれないが、担当するメタロセン触媒の合成は予定よりかなり早く終わることが多く、効率的な触媒開発は心地良い。すると、プラス α の時間がここから生まれる。時間の余裕は次の研究アイデアを生む。良いサイクルが回るのである。

私はこのプラス α の時間を使い、最近油絵を始めた。油絵は自分のための趣味であり、自分が主役である。上手下手は関係ない、人と比べないのである。描き終わった後の成し遂げたという達成感がよいのである。この趣味の達成感がまた仕事を頑張ろうという気持を生み、仕事と私事の良いサイクルが生まれてくる。プラス α はプラス $\alpha+\alpha$ になっている。

本稿の前半で、女性の働きやすい環境が整いつつあると書いた。この流れは今後ますます加速されると思われる。女性が、もち時間の少なさを、仕事のやり方でカバーできれば「男女平等って何?」と言われる時代が来るのも、そう遠くないかもしれない。その工夫の一つが「適当でいいかげんな仕事」である。



檜原真弓 Mayumi HIWARA

三井化学(株) 触媒科学研究所
重合触媒技術ユニット 主席研究員
E-mail: Mayumi.Hiwara@mitsui-chem.co.jp